

ネットにもあげられている

知られざる東京立正の怪談

東ゼミ with O

1. 東京の心霊スポット！？東京立正
2. 東京立正の怪談の真相
3. なぜ学校が怪談の舞台になるのか？
4. 結論

ネットで東京の心霊スポットを検索すると東京立正高校が出てくる。そこで、今回、東ゼミではその真相に迫った。関係者へのインタビューと文献を考察した渾身の研究である。

1. 東京の心霊スポット！？東京立正

(1) インターネット上の情報

- ① 講堂のトイレの鏡に幽霊が映る
- ② 誰からか肩を叩かれたが振り向いても誰もいなかった
- ③ クラブ活動中に事故が相次いだ

(2) M さんのお話し

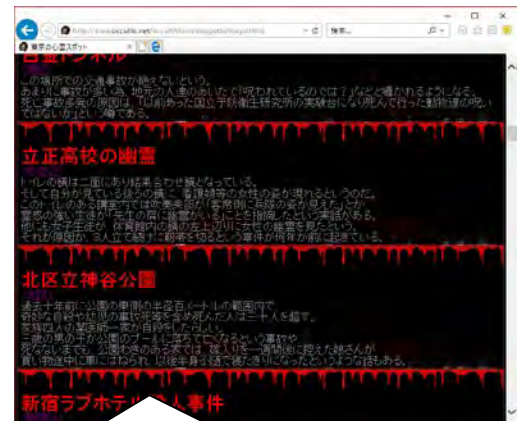
※ 東京立正中学・高校・短期大学を経て現在短大に勤務中。東京立正の生き字引

- ① 女子学生がトイレに入っていると「コンコン」とノックされた。しかしドアを開けてみると誰もいなかった。
- ② ある夜、学生たちが学生ホールにいと雨が降ってきたので、すべての窓を閉めた。ところがふと窓を見ると1つの窓が開いていた。
- ③ 二代前のF元学長はおせんべいがとても好きだった。F元学長は退任されてすぐに亡くなられてしまったが、ある日、おせんべいを置いている所がガタガタと鳴った。SSさんはF元学長が戻って来られたのだと考えている。

(3) I 先生のお話し

※ 1983年に東京立正高校に赴任。中高短大含めて最古参の教員

- ① 高校の校舎は、学校として使われる前は病院だったと言われている。
- ② 講堂に掲げてある岡田日帰上人の絵の目が夜に動くと言われている。



ネットで検索すると・・・



岡田日帰上人の肖像画（講堂）

2. 東京立正の怪談の真相

どれも全国の学校の怪談に出てくる話と同じであり、単なる思い込みや偶然の一致であると考えられる。しかし、こうした怪談が生まれる背景にいろいろな事実があることが分かった。

(1) I先生のお話し

高校のドアの上に病院の部屋番号のような、プレートがはめられていた。そのため、昔は病院だったとの噂が広まったものと思われる。実際には高校の校舎は戦後に建て替えられたものだし、そもそも前身の立正高等女学校ができる前は、この辺りは一面大根畑で、病院などなかった。（『東京立正の70年』で確認済み）

岡田日帰上人の絵の目が動くというというのは、単に油絵が立体的なので、絵を見る角度によって目が動いているように見えるのだろう、とのことである。

今回、高校校舎や講堂を初めて見学したが、とにかく作りが複雑で、校舎・講堂・第一体育館・第二体育館が迷路のようにつながっていた。とりわけ、本学で最も古い建物である講堂は、薄暗い地下で他の校舎とつながっている。いかにも怪談話が生まれそうな作りになっていることがわかった。



3. なぜ学校が怪談の舞台になるのか？

ここでは、全国に共通する学校の怪談から考察してみる。

(1) 立正高等女学校ができる前は病院だった

これに類する話は全国にある。「学校の敷地は墓場だった」「ここは処刑場だった」「戦争中、軍隊が使っていた」等々。

これらは、不可解な出来事を「死」や「靈魂観念」と結び付けて説明する時の便利な道具である。意識的あるいは無意識的に、説得力を持たせるために付け足してしまうのである。

(2) 岡田日帰上人（学園創設者）の肖像画の目が動く

絵の中の動物や人が怪事を働くといった伝承は鎌倉時代の『古今著聞集』にもみられる、いわば昔からの定番である。学校の怪談は、伝統的な話をもとに新たな発想を加えた「創作」であると考えられる。

(3) 講堂のトイレの鏡に幽霊が映る

トイレは学校の怪談の中でも特に多く登場する場である。近年は「トイレの花子さん」が有名だが、その原型は1977年に岐阜市内の小学校ではやった話であるとされている。

現在のトイレは水洗で清潔であるが、かつての学校のトイレと言えば汲み取り式が定番であった。いかにも引きずり込まれそうな不安な空間である。学校のトイレに、この世とあの世を結ぶ場所を見出している、という見解もある。



4. 結論

大越麻弥氏によると、日常生活から生や死の体験が消えつつある現代、学校の怪談が呼び起こす恐怖は、かえって生々しい感情を与えてくれる数少ない衝撃の一つだそうである。

考えてみれば、家族から離れ集団で一日の大半を過ごす場である学校は、ごく普通の日常でありながら、いじめや各種のストレスなども感じる空間でもある。こうした異空間が怪談の舞台になるのはむしろ当然である。否、もはや学校の存在そのものが怪談なのかもしれない・・・。

現在、文化祭に間に合わせるために必死に資料を作成しているが、誰もいないはずの校舎からドアを開け閉めする音が聞こえてくる。怪談をすると幽霊を呼び寄せるというが、本当にそんな気分になってくる。実際には単なる空耳なのだろうが、怪談はこのようにして生まれ広がっていくのだろう。

今回は、ちょっとした興味から調べ始めたテーマであったが、怪談だけでなく東京立正のいろいろな歴史を知ることができた。最後ではあるが、貴重な時間を割きお話しを提供してくれたI先生、Sさん、Mさんに心より感謝申し上げたい。

参考文献

常光徹『学校の怪談』（ミネルヴァ書房）1993年。

常光徹『うわさと俗信』（高知新聞社）1997年。

東京立正70年史編集委員会編『東京立正の70年』（学校法人 堀之内学園）1996年。

おはなし

Mさん、Sさん、I先生（高校）

